

(2) 被爆建造物等のフィールドワーク

〈日 時〉 8月8日(水) 15:25～17:25

〈場 所〉 原爆資料館周辺(山王神社コース)

〈内 容〉 長崎医科大学や山王神社を青少年ピースボランティアと一緒に見学し、被爆の実相を学習しました。



長崎医科大学



山王神社(二の鳥居)



山王神社(被爆クスノキ)



平和公園祈りのゾーン 爆心地公園
(被爆当時の地層)

〈森川 里菜〉半分しか建っていない鳥居を見て、爆風の強さや熱風の怖さがわかりました。73年前のたった一瞬の出来事で、鳥居が半分になったり、旧正門が左に16cmも傾いてしまったりしていて、一番印象に残りました。

〈島根 みなみ〉一番印象に残ったのは、旧正門門柱です。とても重そうな柱が土台から9cmもずれていて、驚きました。

(3) 平和祈念式典

〈日 時〉 8月9日(木) 10:40～11:45

〈場 所〉 平和公園内平和祈念像前広場

〈内 容〉 被爆73周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、原爆が投下された11時2分には、一斉に黙とうを捧げました。



平和の泉で千羽鶴を捧げる



平和公園平和祈念像



11時2分黙とうを捧げる



式典に参列する派遣生たち

〈安戸 乃彩〉

参加できたことを誇りに思いました。合唱や鶴の数からも、たくさんの人の平和への願いがうかがえ、鶴の数に衝撃を受けました。私たちが作ってきた千羽鶴がちっぽけなものに感じましたが、その分たくさんの団体が寄付していると考えられ感動しました。世界や日本中からたくさんの首脳が集まっていますが、その他にも私たちのようにたくさんの子どももよんで参加するべきだと思います。

〈島根 みなみ〉

テレビでは伝わらない雰囲気を感じました。そして、平和式典はいつまでも続けていかなければならないことだと思いました。

(4) 平和学習 (意見交換)

〈日 時〉 8月9日(木) 13:30～15:30

〈場 所〉 長崎ブリックホール国際会議場

〈内 容〉 レクリエーション後、グループごとに平和な世界にするために何ができるかを考え、意見交換を行い、ピースフォーラムで学び伝えたいことをモザイクアートにしました。



グループごとの意見交換



グループで協力しモザイクアートを作る



完成したモザイクアート

〈森川 里菜〉

色々な人の意見があり、どれも共感できました。今自分が感じる幸せを、昔の原爆や戦争のときにできたのかを考えてみると、とても心が苦しくなりました。今、この時、喋ることができるだけでも幸せなんだと思いました。

〈酒井 日向〉

もしも世界が～だったらという題名で話し合った時に、他の参加者の「もしも世界中の人達が知り合いだったら」という意見を聞いて、とても素晴らしい意見だと思いました。

(5) 長崎原爆資料館見学

〈日 時〉 8月9日(木) 17:30～18:30

〈場 所〉 長崎原爆資料館

〈内 容〉 被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示物を見学し、「当時の被害状況」や「核実験の放射能」などを学ぶことで、派遣生一人ひとりが戦争の悲惨さを感じ取り、平和に対する意識を改めて強く持ちました。



館内の資料等を見学する派遣生たち

〈木村 彩花〉

何よりも衝撃だったのは、当時の状況を写した白黒写真と、被爆した壁やガラスといった物でした。あまりにも生々しく、正直言えば、目を覆いたくなる光景でした。壁や瓦の表面に沸騰したあとが泡立っているのを見たことが印象に残っています。ここは誰もが一度は自分の目で見に来るべき場所だと思いました。

〈安戸 乃彩〉

ガイドを聞きながらまわることで、より理解が深まりました。爆弾の模型を実際に見られ、またこのプログラムであまり学ぶことのなかった、外国人の被爆まで学ぶことができました。講話などで聞いたことの現物が実際にあったり、詳しい説明がされてあったり、被爆のことについて広く深く知ることができました。

(6) 自主研修・市内見学

〈日 時〉 8月9日(木) 16:00～17:30

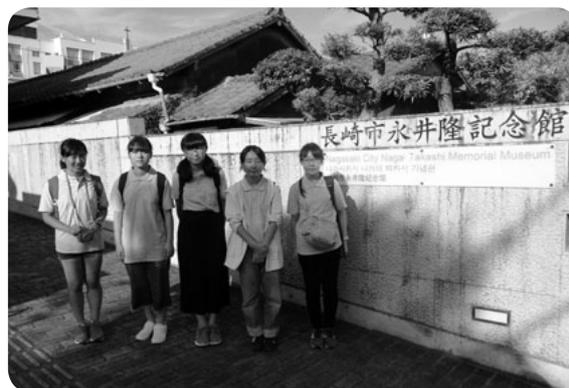
8月10日(金) 9:00～14:30

〈場 所〉 長崎市内各所

〈内 容〉 あらかじめ計画を立て、ピースフォーラムでは行けなかった被爆関連施設のほか、市内の名所などを巡り、長崎の地理・歴史についても学びました。



山里小学校 防空壕跡



永井隆記念館



出島



グラバー園



長崎孔子廟 中国歴代博物館



長崎新地中華街

<森川 里菜>

たくさんの方が平和の灯をしていて、みんな平和を願っているのだと改めて確認することができ良かったです。それぞれデザインがたくさんあって、見ていて心が温まりました。(8日)

山里小学校に幼い子が書いた作文のようなものがあり、それを見ながら想像すると本当に心が痛くなりました。(9日)

長崎は、昔、原爆を受けたとは思えないほど充実していて、グラバー園から見た景色がすごくきれいでした。(10日)

<島根 みなみ>

たくさんの方が平和の灯事業に参加していて、これからもっともっと平和について考える人が増えたらよいなと思いました。(8日)

永井隆記念館が一番印象に残っています。永井隆さんは平和な世界をつくるためにたくさんの本を出していて、すごいと思いました。(9日)

長崎市内には、戦争や原爆について考えることのできる建物などが多く残っていて驚きました。(10日)

<木村 彩花>

原爆によって苦しめられた人々と、これからの自分たちの世界の平和と安心を祈って、キャンドルにメッセージを書かせていただきました。公園内に人々の思いを抱えたキャンドルがたくさんあって、この思いが世界中の人々に届くように願いました。(8日)

一番印象的だったのは大浦天主堂です。今まであまり知らなかった潜伏キリシタンの暮らしやその成り立ちを知ることができました。その他にも、出島などで外国文化と日本文化の混ざった不思議な空間を楽しむことができました。(10日)

<安戸 乃彩>

山里小学校には当時のものがたくさん置いてあり、とても興味深かったです。当時の生徒の日記は悲惨さがよく伝わってきました。また、外で普通に子どもが遊んでいる姿を見て、復興したことを感じるとともに、今のこの状況を突如として二度と壊したくないと思いました。昔、この状況が一瞬にして突然壊されたかと思うと、こわくなりました。(9日)

出島やグラバー園は特に、長崎の立地による外国との交流を知ることができてよかったです。今まで習ったことがある場所に行けて、楽しく長崎の地理歴史を学ぶことができました。(10日)

<酒井 日向>

平和の灯では、平和は明るい感じの色だと思ったので、オレンジ色を入れてみました。平和を作り上げていくのは人間と人間の間にも生まれる愛という感情だと思いました。(8日)

防空壕が印象に残りました。あんなに小さい防空壕の中で、どれだけの人達が助かって、また死んでいったのだろうと考えました。(9日)

出島では、昔の頃の出島の様子を知ることができました。グラバー園では、恋がかなうといわれていたハートストーンを2つ見つけることができました。(10日)

3. 成果報告書

平和とは

森川 里菜

73年前、日本は太平洋戦争中でアメリカやイギリス、中国などの連合軍と戦っていた。そんななか、8月9日午前11時2分、長崎に原爆が落とされたのだ。激しい爆風や熱線、放射線の影響により、当時住んでいた長崎市民約24万人中、犠牲者・負傷者を含めると14万8,793人に被害が及んだ。もし、原爆が落とされた時生きていても、後に放射線ですぐに亡くなってしまったり、体、心にひどい傷を負い、全ての人の人生を狂わせたとも言えるであろう、私はそんなことをつい最近まで知らなかった。もちろん、知らないとはいっても、社会の授業で習ってはいた。だが、被害の大きさや被爆者の今後の人生までは知らなかった。こんな大事なことを学ばせてくれたのは長崎平和使節派遣だ。文面だけで知るのではなく、実際にあった場所に行き、触れて、感じて、話を聞くと、思っていたことよりも何倍もひどかった。

この長崎平和使節派遣の平和とは何か、そして今現在、語り手として活動している被爆者の方々の現状、今後について、伝えていこうと思う。

平和とは何か。これは正解がない問いだと私は思う。まず、インターネットで調べてみた。すると、戦いや争いがなくおだやかな状態と記されていた。だが、私は互いが互いを思い合う世界だと思う。このようにたくさんの考え方が世の中にはある。だから、私は自分の考えを訴えるのではなく、

みんなそれぞれの心に、平和とは、という問いを立ててほしい。そして、答えを見つけ、自分なりに貫いてほしい、そう思った。そうすれば、意見の対立はあるかもしれないが、私たちの、私たちなりの平和な世界になると思う。

そして、今現在、語り手として活動してくれている方々が年々減少している件についてだ。あの日から73年たった今、語り手の方々はご高齢になりつつある。だが、私はこの語り手さんの文化を壊してはいけないと思った。なぜなら、私は語り手さんの話を聞いてとても感動したからだ。初めて話を聞いて、実際に被害を受けた人からの声や話は、文章で見て読んだりするのは全く違った。どれだけ辛いかやその時の状況などが本当によくわかり、実際に傷ついた体を見たりして感じた方が大きいと思う。ピースフォーラムの時の語り手の方は、私は最初、歩き方が少し不自由そうに見えただけで、他は何の被害も受けてないように見えた。だが、その人の話を聞いていると、足がひどく、お腹も火傷しているという。このように外から見えないだけで、実際の被害は、被害を受けた人にしかわからないから、語り手の文化を途絶えさせてはいけないと思う。しかし、時が経つのは仕方ないことだ。

では、どうすれば語り手の人の思いを後世にまで伝え続けられるか。語り手の方だけでなく、亡くなってしまった被害者の方々の、家族の思い、戦争、核兵器の悲惨さを伝えて行くことが私たちの役目だと思う。私はまず、身近な人に伝えようと思い、長崎から帰ってすぐ、母親に今回の派遣で学んだこと、感じたことを伝えた。すると、初めて知ったことも多かったらしく、平和について改めて考えてくれた。これは私の

母親だけではないと思う。父親、友達、親せき、全ての人に当てはまることだと思う。だからもっと多くの人に伝え、情報社会の今なら、海外にまで伝わることだってあると思う。今後、私は今回の経験で得たことを周りに広め、被害にあった方々の思いと、核兵器、平和について、更に深めていきたい。

最後になってしまいましたが、長崎の原爆についてとてもたくさんを知ることができて本当に良かったです。ありがとうございました。そして、世界が平和になりますように。



長崎平和使節派遣報告書

島根 みなみ

広島に原爆が投下されてから3日後の1945年8月9日午前11時2分。このとき、史上2回目の原爆が、長崎に投下されました。原爆の投下によって、約7万4千人もの尊い命がうばわれました。

原爆が悲惨なことだとは知っていました。でも、具体的に当時の長崎がどうなってしまったのか、あまり詳しくは知らなかったもので、知りたいと思い、今回の長崎平和使節派遣に参加させていただきました。

1日目に行われた、被爆体験講話では、原爆がどれだけ悲惨なことか分かりました。原爆は、とてつもないエネルギーをもっており、沢山の罪のない命を一瞬にしてうばいました。助かった人々も後遺症や被爆者という差別に苦しんでいました。後遺症で苦しんでいる人がいることは、知っていましたが、差別を受けている人がいることは、知りませんでした。原爆は、人の人生を一瞬にして変えてしまう、恐ろしいも

のだと改めて思いました。

そのあと、被爆した建物などを見学しました。

まず、一本鳥居を見学しました。この鳥居は、爆風によって左側が飛ばされてしまった鳥居です。被害はそれだけでなく、鳥居の表面をとかしました。熱線を浴びた側は、浴びていない方と比較すると、石特有のザラザラ感は、なくなっていました。

次に、被爆したクスノキを見学しました。被爆した木ときいていたので、小さくてヒョロっとしている木だと思っていました。でも、実際は、とても大きな木でした。クスノキは被爆をして、もうだめかもしれないと言われていました。でも、徐々に回復していき、今では高さ21m、幹回り8m58cmもの、立派な木に成長しました。私はクスノキのパワーに感動しました。

2日目には、平和祈念式典に参列させていただきました。テレビでは味わえなかった、式典の雰囲気を感じることが出来ました。この式典には、小学生から年配の方まで、たくさんの方が参列されていました。また、海外の方々も参列されていました。この式典は、世界の人々が、世界について考える大切な機会になると思うので、毎年欠かさずに行うことが大事だと思いました。

平和祈念式典の後には、平和使節派遣で集まった中高生を対象に、平和についての意見交換会が開かれました。みんな、「平和な世界を作るためには、自分に何が出来るか」というテーマで話し合いました。私は、一人一人が原爆について知ることだと思いましたが、他の人は、たくさんの人に原爆の恐ろしさを広めるなど、同じテーマだけれど、出てきた意見はさまざまでした。

ここで、みなさんに質問です。

平和な世界を作るために、私たちに何が出来るでしょうか。

私は、一人一人が、原爆の悲惨さを知ることだと思えます。そして、原爆の悲惨さを知れば、二度と原爆をしてはならないと考えるはずで、そう考える人がたくさんいれば、世界平和につながると、私は考えます。



「ナガサキ」を見て

木村 彩花

この研修に参加したきっかけは、以前学校で広島原爆について学習をしたことがあり、原爆についてもっと知らなければならぬと思ったからです。本を読むことはもちろん大事ですが、やはり生で学ぶことで得られるものは大きいと思ったので、参加させていただきました。

一日目は被爆された方のお話を伺いました。この方は、被爆された後のご自分の人生について語ってくださいました。被爆によって足が腫れ上がったため、まっすぐに歩けず、痛みで学校へ通う道のりが辛かったとおっしゃっていました。特に雪の日は、痛みと寒さで足の感覚がなくなってしまい、進んでは転ぶことを繰り返していたそうです。通ってきた道の雪はとけ、歩いたあとには血が点々と落ちていたというのを伺って、幼い子供がこのようなむごい仕打ちを受けなければならなかったということがショックでした。また、学校についても、ケロイド状になった火傷の跡や足を引きずって歩く歩き方についてからかわれるなど、自分ではどうにも出来ないことでいじめられていたというのは、聴いていて締

め付けられる気持ちになりました。大人になっても、被爆者だということや外見のことで差別を受けたそうで、死にたいと思うことが何度もあったけれど、他の被爆された方が線路や崖で自殺するのを何度も見ているので、鳥肌がたつたとおっしゃっていました。私には、あまり人の生死についてよく考える機会がなかったので、心ならずしりと響きました。被爆された方の人生をご本人の口から直接聴くというのは重い経験でしたが、それだけ大切なものなので、一生このお話を大事にして、次の世代へ伝えていこうと強く思いました。

自主研修で行った山里小学校原爆資料館や長崎市永井隆記念館で読んだ体験談も、痛々しいものでした。暗くて蒸し暑い防空壕に一目散に入り、出てくるとそこは一面焼け野原、家族も重傷を負って死にそうだという状況に小学生がさらされているというのは、現在の日本では考えられないことです。日頃から安心して生きられる世の中ではなかったことが、展示品からも感じられました。一瞬にして大事な人を奪い、多くの人を傷つける原爆がこの世にあってはならないと思いました。

青少年ピースボランティアの方に案内していただいたフィールドワークでは、長崎医科大学の旧正門門柱を見学しました。写真で見たときにはよく分かりませんでした。現場で見ると、この太い石柱が風でこんなに動かされるのかと原爆の威力をそら恐ろしく感じました。二日目に行った長崎原爆資料館では、瓦の表面が沸騰して泡立った状態で冷え固まったのを見て、沸騰という言葉に目を疑いました。私の予想をはるかに超えたもので、言葉を失いました。

今回の研修に参加させていただいて、最

も衝撃を受けたものの一つは、長崎原爆資料館に展示されていた、当時の長崎市の写真でした。あの写真の光景が現実として自分の周りの全方向に広がっていて、それがほんの少し前まではいつもの故郷の姿をしていたということ、人間が自分の知っている形では存在し得ないということ、点在する遺体の中に自分の家族や友人がいるかもしれないということ、自分も死ぬかもしれないということ。このような状況に置かれたときの心境を思うと、胸を押さえずにはいられませんでした。それに加え、2018年の8月9日でさえ暑さのために外に長時間いるのは辛かったのですから、73年前の原爆によるひどい火傷と照りつける太陽による苦しきは、想像を絶するものだったでしょう。写真は全て白黒でしたが、当時の人々の目には鮮明な映像として焼き付けられていたのです。私たちはこのことから目をそらすことができるし、見ない方が楽ではあるかもしれませんが、これは逃れようのない現実が起こったことです。人間として、真摯に向き合わねばならないと思いました。

この研修を通して私が感じたことは、一日目にお話をしてくださった被爆者の方、自主研修で行った記念館の永井隆博士、二日目の平和祈念式典で演説をなさった方など、原爆を経験した方々がみな未来に平和という希望を託していることです。この期待に応えられるように、また私たち自身のためにも、平和活動をしたいと思いました。

この世界は、自分の住む世界です。戦争や核によって、自分の住む世界が荒らされてもいいのか。戦争と平和について、正しい情報を伝え、いろいろな視点から考え、個人がそれぞれ明確な意志を持ってこの問題に向き合えるように最善を尽くそうと思

いました。

最後になりましたが、このような人生において重要な体験をさせてくださった方々に深く感謝しております。本当にありがとうございました。

世界平和への野望

安戸 乃彩

あの日から、73年。あの戦争は日本にたくさんの方を教えてくれた。それによって日本には、広く強く非核化への想いが根付いてきた。日本中のほとんどの人が平和を願い、戦争は悪だと思っているだろう。しかし、それを形にしたことがある人はどれだけいるだろうか。例えば平和祈念式典のテレビ放送を見たことがある子どもはどのくらいいるだろうか。私は今年初めて、広島のをを見た。私は今の社会には、平和への想いは根付いていると思うが、それらを形にする機会は欠如していると思う。

また、戦争から73年経った今、私たちは戦争を経験した世代から直接それを受け継ぐ最後の世代となっている。だからこそ、私達は語り継いだことを私達の次の世代につないでいくという使命がある。

私は、平和への思いを形にする機会を得て、それを同世代や次世代に語り継いで行くためにこの派遣プログラムに参加した。

私が長崎に来て初めに気づいたことは、至る所に折り鶴があるということだ。私達も長崎に行くに向けて5人で協力して千羽鶴を折り、納めた。しかし、そこに甚だしい数の千羽鶴があった。私達5人の力の小ささを感じるとともに、たくさんの方が平和の願いを込めて折り鶴を作ったのだと感じ、とても感動した。

今回の派遣プログラムでは、平和祈念式典、ピースフォーラムが最も大きなイベントとしてあったことだろう。それらでは、平和の大切さ、戦争が起きたらどれだけの幸せが失われるか、非核化への想いなど忘れかけていたものを再確認することができた。想いを形にする機会がなければいつか忘れてしまう。長崎の子どもと東京の子どもの意識の差を感じた。どちらの子どもも、今後日本の未来を背負って行くことに変わりはない。だから、平和への想いを日本中の子どもに根付かせるために、戦地でないところで生まれた子どもにも平和や戦争の悲惨さについて、再認識させることが必要だと思った。日本に、平和教育の機会を増やさなければならない。この夏私は長崎でたくさんの場所に行き、インターネットでは絶対に得て学ぶことのできない primary source から戦争と平和を学ぶ貴重な機会をいただいた。まずは、私が今回 primary source から教わったことを、新鮮なまま周りに広めていきたい。

また私は平和教育の機会を増やし、戦争と平和について再認識させるのは、日本だけにとどめるべきではないと思う。はじめての被爆国であるという立場から、たくさんのお話を他国に伝えていくべきだと思う。私はアメリカの子どもにそれを伝えていきたい。アメリカが日本に原爆を落とした理由は、アメリカが戦後の米ソの対立を有利にするため、北海道はソ連に占領されるのを防ぐため、戦争を早く終わらせるためという理由があった。日本人でそれを知っている人はどれだけいるだろうか。アメリカにはアメリカの立場があり、日本には日本の立場がある。しかし、アメリカでは広島や長崎に関しての第一次資料、またそこで被害を受けた人や、現在そこに住ん

でいる人の考えを知る機会がない。だから、私はそれらをアメリカの子どもたちに伝えていきたい。私の学校では、それをフロリダの子どもに伝えるプログラムがある。それに向けて私は今、学校の授業で、各国が第二次世界大戦についてどう考えているかが書かれた文章を英語でそのまま読み、他国の考えも学んでいる。それに加え、私は10月に広島に行く。長崎で学んだことと広島でこれから学ぶこと、また授業で学んだ他国の考え、どれも学ぶことでより戦争や平和への理解を深め、フロリダの子どもたちにそれを伝えていきたい。これからのこの世界を担って行くのは世界の子もだ。日本の子どもだけではない。だから戦争と平和についての理解は、日本だけにとどまってはならない。

世界に平和への想いを根付かせたい。それが私の願いだ。長崎に行ったことは、私のこの大きな野望の第1歩目となった。長崎でたくさんの primary source から戦争と平和を学べたこと、本当に貴重な経験となった。長崎派遣プログラムの参加を決めてよかったと思うのと同時に、この経験を無駄にはできないと責任を感じる今日この頃である。



核のない世界へ

酒井 日向

今回で二度目の長崎派遣となりましたが、私が再び長崎派遣に応募した理由は長崎をより深く知り、平和への思いを新たにするためです。人間は忘れゆく生き物です。毎日の楽しい生活の中で大切なことでもふと忘れてしまうことがあります。それでも忘れてはいけないことがあるのです。それを

確かめるためにもまた長崎を訪れなければならぬと考えていました。

二回目ということもあり、前回より落ち着いて臨めたのですが、今年も平和祈念式典は厳粛な雰囲気にも包まれていました。そして黙とうの1分間は永遠に続くような、長く、神聖な時間を感じました。ここに立ち、その悲劇に思いをはせたとき誰しもが特別な感情にとらわれるのです。そして平和祈念式典の中で一番心に残ったことは国際連合事務総長のアントニオ・グテーレス氏がいらしたことです。教科書でしか見たことのない方に会えるとは夢にも思わなかったもので、少し不謹慎ですがとても感動してしまいました。残念ながら事務総長の演説は英語だったので内容についてその時は理解できませんでした。東京に帰ってきてから演説の内容について調べてみました。

グテーレス氏はポルトガル人で長崎とは政治的、文化的、宗教的に縁の深い国であることを述べていました。そして長い歴史を持つ魅力的な国際都市であることだけでなく、原爆により多大な犠牲者を出した街であるにも関わらず、強さと希望の光を失わない不屈の精神の象徴であると言っております。私もその通りだと思います。原爆は大勢の犠牲者や建物を壊せても心の中までは打ち砕くことはできないのです。そしてその困難から立ち上がった人々が世界中で平和と軍縮の指導者として平和な世界への礎となっているのです。これ以上新たな被害者を出さないという強いメッセージに心打たれました。

その一方で73年たった今も核戦争の恐怖のもとに私たちは生きていて、核保有国は軍備を拡大し、一向に核兵器の廃絶は進んでないように思われます。今回調べてわかったことですが、国連が主導的役割を担

えていないのは核兵器を所持している上に拒否権を持つ国及び日本などの影響力のある国からは事務総長は選ばれないということです。つまり、リーダーシップを取れる国は軍縮に対して反対を表明しやすいのです。大国と言われる国々から選ばれたリーダーが持ち回りで役割を担うのであれば安易に反対出来ず、より平和な世界へと繋がると思うのです。もちろん小国の意見が蔑ろにされてはいけけないので現行の制度にも良い部分はあると思います。しかし、今こそ核兵器廃絶という目標に向けては新しい方法、体制が必要とされているのではないのでしょうか。

最後に原爆資料館を伺った時に以前一カ所だけ怖くて見る事が出来ない場所がありました。その時は見ずに逃げてしまいましたが、今回は二回目ということで勇気を出して見る事が出来ました。ふつうに見ると少し焦げた壁としか見れないようなものが、よくよく見てみると焦げているところが葉の茎や、葉の一枚一枚にくっきりときれいに残っていました。そして私はこのような「影」に見覚えがあります。それは人間の「影」です。その写真を前に泣いている5歳ぐらいの子供を見ました。人は言いようがない恐怖に理解を超えておびえるしかないのだと思いました。グテーレス氏が演説の最後に「私たちみんなで、この長崎を核兵器による惨害で苦しんだ地球最後の場所にするよう決意しましょう。」と言っていました。私たちの絶え間ない努力の先にその未来があると思いました。そしてこれからも私はその努力を続けていく決心を新たにすることができた今回の研修でした。

4. 派遣をふり返って（感想）



森川 里菜

実際に被爆した建物を見て、とても迫力を感じ、原爆の恐ろしさを感じました。

今回の派遣で見たもの、感じたものを周りの人へ伝え、戦争についてももっともっと知ることが大切だと思いました。

戦争の辛さ、怖さがどこに行っても感じられました。二度と消えることはないのだろう。

だからこそ、悲惨さを伝え、今、平和なことはとてもありがたいということを伝えていかなければと改めて思いました。



島根 みなみ

今まで原爆については漠然とした知識しかありませんでしたが、実地で研修を受けたことで、原爆がおよぼした影響を身に迫って感じました。

私達は戦争を経験したことがないので、被爆された方々やそのご家族の気持ちを完全に理解することはできないかもしれませんが、一人ひとりが「もし自分だったら」と想像し、相手の気持ちを理解する努力をするべきだと思いました。



木村 彩花

原爆が落とされたとき、被爆者への差別が起こってしまうのも問題で、それは差別をしないということが社会に根付いていないからだと思いました。だからこそ、このプログラムなどで、多くの人に平和への意識を根付かせることが重要だと感じました。

また長崎にはあらゆるところに鶴があつて、たくさんの人の平和を願う気持ちが伝わってきました。現地の人々の平和への思いはやはり違うと思いました。現地でしかわからないことだと思います。



安戸 乃彩



酒井 日向

私が今回応募した理由が「私の知らない長崎を色々な場面で知りに行く！」という理由でした。

原爆資料館では去年、私が中2の時に見られなかった場所や展示物を見られましたし、出島やグラバー園、孔子廟では長崎の歴史を知ることができました。



第3部 資料編

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式
HIROSHIMA PEACE MEMORIAL CEREMONY

平成30年(2018年)8月6日

August 6, 2018

広島市

The City of Hiroshima